

別冊 おおいしだものがたり

～資料館資料編～

小松均『栗の花咲く最上川』(上・中・下)

今回は資料館で開催中の「開館40周年記念企画展 小松均展」より、日本画家・小松均の作品の魅力をご紹介します。



小松均(明治35-平成元)画『栗の花咲く最上川』を前にすると、まずはその大きさに圧倒されます。上中下それぞれが縦1m、横3.5メートル以上の大画面には、駒籠・大浦間を流れる最上川の風景が、所々に色を散らしながらも墨を基調に描写されています。ただし私たちが水墨画に持つイメージのような、墨の濃淡による表現や洗練された構図、大胆な余白などはありません。その大きさと併せて、どこか野暮ったいような印象さがあります。それでも、馴染み深い町内の最上川でありながら、現実を超えて迫るものがあります。

この絵は、メインと呼ぶべき対象がわかりにくい作品です。中心と思われる最上川も岸辺の集落も、遠景の山々や空に浮かぶ雲に至るまで、画面全体が緩みなく描かれています。そのせいで目が捉え所を失い、主題が埋没してしまうのです。これがどうしても、あかぬけないようなしつこさを与えているのも事実です。もし他の画家ならば画面に緩急をつけるはずですが、ただ、それでは恐らく、このうねるような生命感を見る者に訴えることはないでしょう。この絵からは、修行僧が一筆一筆をゆるがせにせず写経する姿勢が思い起こされます。引かれる墨線は、一本一本に祈りが込められているような存在感を放っているのです。

小松均はこの長大な作品を「直写」という方法で描きました。「直写」とは、猟師が獲物に照準を合わせて引金を引くように、対象から視線を外さずに、対象と空間の隙間に筆を差し込むように描く彼独自の写生感です。彼はこの「直写」により、現地に持ちこんだ大きな画紙の前で、下絵までを完成させてしまいます。この時、受ける印象の強弱が墨線の強弱になるといいます。現地でのスケッチを基に下絵を起す通常の方法に対して、「直写」は眼前の景色ばかりか、そこから起こる意思と感動も、大画面にそのまま刻み込むのです。

小松均の作品は、上品でも洗練されてもおらず、技巧的にも優れているとはいえないかもしれませんが、『栗の花咲く最上川』からは、雑味もえぐみもある、濃縮還元ではないストレート果汁のような、生々しくて瑞々しい生命力を感じます。それが、実際の風景を描いているながら、現実の景色以上に深い感銘を鑑賞者に与える原因なのかもしれません。

「開館40周年記念企画展 小松均展」は9/24(月)まで



楽がき帳

1日順延し、17日開催となった大石まつり最上川花火大会。過去の広報おおいしだをめぐってみると、前回の雨のために順延されたのは昭和62年、31年前のことでした。この年まで大石まつりは例年17日に開催されていました。花笠踊りパレードは中止され大石田第一中学校体育館で審査会が17日に、花火大会は18日に行われ、第2回町民号20号玉3連発が打ち上げられました。

大石まつりが終わると、「もう雪降ってくるは」という声が聞こえてきます。たしかに先月末ごろまではあんなに寝苦しい夜が続いたのに、最近は朝晩めっきり涼しくなって、窓を開けていると寒いと感じるようになりました。

一方で日中は30度以上という日もまだ続いていますので、皆さん体調管理には十分お気をつけください。(あ)

町の人口 平成30年8月1日現在

世帯数	2,352戸	(-2)
総人口	7,160人	(-10)
男	3,508人	(-4)
女	3,652人	(-6)
(7月中の異動)		
出生	1人	転入 9人
死亡	11人	転出 9人

※この人数は外国人も含めたものです。